



タイトル 西尾幹二のブログ論壇

著 者 西尾幹二 (にしお かんじ)

出 版 社 総和社

発 売 日 2010年12月18日

ページ数 389 ページ

「インターネット（以下ネット）時代の到来を迎え、素人による言論発信が隆盛を極めている。言論のプロが既存の媒体にしがみつくのみでは、その存在価値の半分以上が生かされていないことになると、説得され、ネット上に自分の意見を開陳する場を作った。

また、私の著作に接した事のない方々のためにも、硬すぎない未発表の新鮮な日録に接してもらう事により、私のその他の著作などに興味を広げていただく事を目的にしている」と著者は述べている。

本書を読んだあるブログの紹介があった。こんな風に・・・。

「またもや恐るべき本に出会ってしまった。家人は読書中の僕の集中力の凄さに驚いている。近寄りたがいと恐れる。実はそんなことはない。本にその力が備わっていないと、そうはならない。オピニオン誌の類はまったく読まない。ただ、毎月、主要紙の目次だけは確かめている。一つだけ、のがしていた雑誌があった。「WILL」である。今月から違う。だからというもおかしいが、頭の中に必読者リストがあり、再構成され論文集になると買い求めるのを常としている。即日、注文するのは西尾幹二だけである。氏の本は初期の文芸評論、手に入れようがないので、それと翻訳本、それ以外は過去に^{さかのぼ}遡って読んでいる。

いやはや僕の思考回路の薄っぺらさが、贗物ぶりが、いやというほど思い知らされた。

対米関係の理解も、軽はずみであった。ここまで現下の経済を、国際政治、国家戦略まで俯瞰し、鋭すぎるほど論じているのを知らなかった。それがその雑誌に掲載されていた。

近頃、保守の論壇があまりにも類似して、読む前から結論が判り、いささか食傷気味であった。はっとさせられるような真新しい切り口に、だんだん出会えなくなった。保守派の主張の場が増えたことも大きい。だから、だれかれ構わず読むということはしない。見

分ける眼力を心がけてはいる。が、言うほど簡単ではない。それは自分をも評価することになる。

保守化に拍車がかかる僕に距離を置く人も多い。批判はするが、朝日や岩波の本にも目を通す。若い頃に染みついたものを抜き取る作業にもなる。……………。

初めて著者の本を読まれる諸氏は、これに似た感想を持たれるであろう。

さっそく、目次を見ておこう。

はじめに

第1章 皇太子さまの御忠言」の反響

第2章 歴史は変化し動く世界である

第3章 「GHQ焚書^{ぶんしよ} 図書開封」1・2・3・4……………

暗い海への私の73歳の船出

第4章 大江健三郎の欺瞞、

私の29歳の評論「私の受けた戦後教育」と72歳のそのテレビ朗読

第5章 「三島由紀夫の死と私」をめぐって

私の35歳の体験と72歳のその総括

第6章 ニーチェ・江戸・小林秀雄

第7章 大寒の日に

「西尾幹二のインターネット日録 (<http://www.nishiokanji.jp/blog/>)」の歴史

長谷川真美 (ブログ管理人)

インターネットの良いこといやなこと — あえて八年前の文章を「あとがき」に代えて

扱っているテーマは、どれをとっても興味深いが一、三拾い読みしてみよう。

最近気が付く人には気が付いていたが、言論界に明らかに一つの変化が生じてきた。今まで「保守的」と思われ比較的まとまっていた陣営が戦争観に関して二つに分かれたのだのである。すなわち、「あの戦争を外国から強いられた戦争とみるか、日本国内の悪の発動とみるか」、「侵略された側とみるか、侵略した側とみるか」、「如何ともし難い運命との戦いとみるか、回避しようと思えば回避できた愚かな選択とみるか」、等々……………。

以前からこの二つの考え方の対立はあったのだが、マルクス主義的左翼と対決している間の思想界では、保守が反共親米とほぼ相場が決まっていたので、この二つの価値の相違をあまりはっきりさせないできた。反共保守の名において大同団結していたからであろう。

いまアメリカの覇権が終わるのではないかという時代認識 — 勿論明日どうこうではなく10~20年の時間はかかるであろうが — 少なくとも覇権の意味が、その質が変わる潮目の時代に入ってきている。それははっきり言えるであろう。

このことによって歴史の「^{パラダイム}枠組み」も変わるのである。日本人は日清戦争から4つの戦争を武士道の精神で戦ったのではなかろうか。英米の「金融資本主義」とも、ソ連の「コミンテルンの教条主義的行動」とも、ドイツやイタリアやフランスを襲った「ファシズム」とも、日本はそのどれも関係がない。それらから「心理的」影響を受けはしたが、せいぜい時代のモードとして受け入れただけで、基本は「国家の危難に対し武士道の精神をもって起ち上がった」のではなかっただろうか。

今そのことが多くの国民に少しずつ実感されて来て、言論界の歴史観も二つに分かれてきたのである。そこへ田母神氏の事件が起こった。丁度いい切っ掛けだったのである。……………。

「新しい歴史教科書」の最初の版の「まえがき」に著者はこう書いている。「歴史を学ぶのは、過去の事実を知ることだと考えている人がおそらく多いだろう。しかし、必ずしもそうではない。歴史を学ぶのは、過去の事実について、過去の人はどう考えていたかを学ぶことなのである」。

上の表現は単純だが、中学生だけでなく、世の大抵の歴史家もこのことが判っていない。「過去の事実について、過去の人はどう考えていたかを学ぶ」のは容易^{たやす}いことではないからである。過去の事実について現在の人はどう考えているかが先入見になり、それに囚われ、過去を歪めてしまうからである。

そのいい例が、以下の「西尾—秦論争」である。

秦 西尾さんは「諸君！」3月号の論文「米国覇権と『東京裁判史観』が崩れ去る時」の中で、現在の「昭和史」研究のあり方を強く批判され、私にもその批判の矛先を向けておられる。今日は、西尾さんに直接、裁きを受けるという心境で参りました。

西尾 私は歴史の専門家ではなく、歴史に関心を持つ文芸批評の徒として、自分なりの関心で読書を重ねてきました。秦さんのこれまでのご業績にも、多くのことを教えられてきました。従軍慰安婦や沖縄戦に関する秦さんのご研究は決定的です。現場に足を運ばれた正確な論には、ブレがない。それへの敬意は現在でも揺らいではおりません。

しかし、いま米国覇権がぐらつきだし、世界は大きく変わる可能性がある。歴史を見、語る際の思考のあり方も、根本的な転換を余儀なくされております。そういうなか、長らく我々の思考の前提となってきた「昭和史」という枠組みでは、これからの日本人の国家的アイデンティティを支えることは出来なくなるのではないかと思えてなりません。不遜も、不利も顧みず、「昭和史」ブームの象徴とも言うべき秦さんほか数氏を、あえて批判の俎上に載せた所以です。

もとより日本が一方的な侵略国家であったとする「東京裁判史観」は、現在もはびこり、弊害は根強く残っています。覇権国家アメリカによって植え付けられ、その支配下に日本人が忍耐してきたこの「自虐的国家観」を憂いつつ、私は「新しい歴史教科書をつくる会」

を立ち上げ、8年前に「新しい歴史教科書」を世に問いました。だからこそ、昨秋、田母神俊雄自衛隊前空将の「日本は侵略国家であったのか」という論文に出会い、これまで我々が必死に播いてきた種子の萌芽を見て、感銘したのです。

秦さんのような信頼すべき歴史家が、田母神氏の主張を一刀両断の下に切り捨てられたことは意外であり、心外でした。

秦 田母神論文の全体的な趣旨や提言については、私もさしたる違和感はありません。だが、田母神氏が自説を補強するために挙げている様々な文献は、いわゆる“陰謀史観”と呼ばれる類の、根拠のあやふやなものばかりです。こうした雑駁な読書をベースにした論脈であることを考えると、結論が如何に立派であっても支持する気にはなれません。

そのあたりは、実は西尾さんも薄々気付いておられる。三月号論文の中では「論文に様々な不備がある」ことを認めた上で、「書き手が文章書きを仕事としていた人でない以上、一般国民の目には「取るに足らぬこと」であるという。しかし、私は歴史研究者ですから、依拠した文献の質を「とるに足らぬこと」だとは、全く思わない。

西尾 いま、はしなくも陰謀史観という言葉が出ました。この言葉は誤解を招きがちなので、私はあまり使いたくない。しかし、基本的に「陰謀」はあったというのが私の考え方です。その言葉が小説的に過ぎると言うなら、先の大戦の背後には、十字軍に源をもつ宗教的情念に発した西欧列強の地球上を処断するという「裁きの意志」があったのです。それに、共産主義への忠誠心というもう一つの歴史の清算の「意志」も絡まっていました。

これについては、後ほど詳しく議論したいと思いますが、戦争の背景にある、そうした「意志」を捉えなければ、当時の歴史を正しく理解することは出来ません。……。

上の文章は、著者と秦郁彦氏との「諸君！」での論争の一部である。細かい歴史事実論のそれぞれよりも、歴史実証主義に籠っている秦氏に対して、著者は秦氏の観念的思考のあり方そのものに向かって、より手厳しく批判している。

秦氏は、歴史的技術や意味は単一に固定したものであって、動かすことは出来ないという。こうした古典的な歴史実証主義が、歴史学の方法論として完全に時代遅れであることは、世界的な思想の流れからいえば、ほとんど決着がついている問題である。ところが、日本の現実的論壇というのは実に奇妙な世界で、時代遅れなはずの秦氏を近代史の専門家として高く評価しているのである。この奇怪さは著者にとって何よりも耐え難いことなのである。

この対談は、両者が「歴史に対する態度」の根源に触れあった時、秦氏は専門家という「籠城戦」に後退し、著者の攻勢継続で対談は終わっている。

この西尾・秦論争に関して、多くのブロガーや私信の見解が本書に引用されていて話を更に面白くしてくれる。優れた評価は現実的論壇ではなく、ブログ論壇の方に数多く存在していることが良く判る。世界は日本を公平に見てくれているというのに、日本人が自分を歪めて見ようとするのだから話しにならないともいう。

ところで、秦氏との論争は、田母神前空将の論文問題も内容的に大きく関わっている。秦氏以外からも、田母神前空将にむかって激しい批判の数々になされた。著者は、先頭に立って、どの論壇人よりも熱心に田母神前空将を擁護した。著者のブログは、田母神前空将擁護の前線基地のような様子を呈してさえいる。

著者は、戦後の戦争に敗れた理由を以下のように的確に分析する。すなわち、『欧米戦勝国は、「自由」とか、「正義」とか、「人道」とか、都合のよい言葉を、全部独り占めしてしまった。さらに、自分たちは、あたかも「欺瞞」や、「残虐」や、「裏切り」とは関係がないという前提で、すべてを語るルールをさっさと敷いてしまった」。これらが如何に矛盾したものであったかは、大戦後間もなく、アメリカも、イギリスも、フランスも、オランダも真っ先に植民地に戻ってきた。日本だけが一方的に侵略国家だったという欧米デモクラシーの正義の歴史観のウソに田母神論文が火を点けたわけである。

ネットに特別に熱心に専念している人は、映画の次にテレビがあったように、活字本の次にネットがあるかのように思い込んでいるが、機能が違うので、私はそうは考えない。少なくとも私にとってネットは活字本の補助具としての役割を越えるものではない。

第一、ネットは書き手（すなわち生産者）の経済性を保証していない。会員制にした一部の例外はあるかも知れないが、サイトの提供は一般に無料である。

映画の次にテレビの時代が確かに到来したが、テレビは巨大な経済性を保証した。活字本の次にネットの時代が確かにやってきて、そのために（としか理由は考えられないのだが）書籍の売れ行きが激減した。出版界不況は統計の示す通りである。

けれども、ネットによる情報の発掘は、情報の無限の広がりを示しただけで、果てしない情報の拡散と同時進行しているので、発掘が必ずしも集中度をもたらさない。

世にネットの普及により、本が廃れていくという傾向があると言うが、やはり手に持てる紙の本に勝る知識の宝庫はない・・・・・・・・。

ネットは書き手の経済性を保証していないと言いながら、ちゃっかり本書を出すあたり著者は強^{した}かである。



かつて、あるテレビ番組で、識者何人かと、若者たちを集めて、凶悪事件を起こす若者について議論を行っているのを見たことがある。その中で、若者の一人が「なぜ、人を殺してはいけないんですか」と発言した。ところが、そこにいた識者は、誰一人としてその問いにまともに答えることが出来なかった。その中でただ一人キャスターの筑紫哲也氏のみが、「人が人を殺して良い時があって、それは戦争の時だ」と答えて、うまく切り返していたが、しかし、その答えは若者の問いに答えたものではなかった。テレビ画面を見ながら、「それは、社会の規範を破れば、社会そのものが成り立たなくなるからだよ」と独り言を言ったものの、これでは若者たちを説得できないなと不安になった。こういう質問に、大人たちはちゃんと答えなければいけない。そうしないと、若者たちは、「大人にも判らないんだ。何故いけ

ないのか判らないのに、ただ、いけないといってるだけなんだ」と感じさせてしまうからである。そこで、福田和也、清水義範、池田清彦、西尾幹二、4氏の書籍から知恵を借りてこの問題について考えてみた。その中で、とくに西尾幹二氏の鋭く深い考察力には驚いた（殺人を考える）。

「ブログは、読者からメールによる反響が多く、自分の生きている同じ町に、同じ空気を吸って、同じようなものを食べている人間に、偉大な「例外者」がいるということを知った。ネットの世界には、ものすごい人間がいる」と著者は驚く。

人は、手っ取り早く安心を得たいがために、自分好みに固定された思考の枠組みの中に、自ら進んで嵌まり込むが、自分とは思考回路の違う高い知性の著者に出会うことも必要である。著者は、親米派だという。少なくとも反・反米派だそうである。著者の作品を読むと、考え抜く姿勢がひしひしと伝わってくる。

「学界」、「論壇」に囚われず、「右」、「左」というイデオロギーに左右されない著者はこれまで幾度となく論争を巻き起こしてきた。著者の問題提起に対し、「文藝春秋」や「正論」でさえ真っ向から取り組めなかった問題も、ネットの世界では盛んに議論され、あたかも「ブログ論壇」の様相を呈している（本書のタイトルはこの辺から出て来たのかも知れない）。

対話をうまく取り入れて読者との双方向性を活かすという構成がたいへん新鮮だ。また、著者批判も適度にちりばめられ、討論の公平性がよく保たれており、読み易い。

単行本未収録の論文も加えられており、目次からも判るように、「皇室」、「昭和史」、「GHQ焚書」、「保守」などについて、最新の論争の記録も収録されている。

本はよく読むがネットの世界をあまり覗いたことのない人、高校の歴史教科書的な見方しか知らなかった人には、本書は、きっと知的刺激に富んだ読書体験を提供してくれるはずだ。

2014. 12. 8